

子どもの育ちと係わり

副会長 新家 正美

児童虐待を始め小学校への刃物を持つての乱入、生徒、先生の殺傷と子どもや学校に対する不祥事が後を絶たしません。

数年前に、ある学校の校長先生から聞いた、ほんの些細な事柄であるが、心に残っているお話を紹介します。

学校の行事として、一泊の林間学習に出掛けましたが、途中で雨に降られぐっしょりと濡れてしまいました。宿泊の予定の少年自然の家に向かうための電車に乗車した時の事です。電車は空いていて、皆腰掛ける余地がありました。その時に誰言うと無く、私達が濡れたままで腰を掛けると席が濡れ、後のお客さんに迷惑が掛るから立って行こうと、全員立ったままで目的の駅に着き、少年自然の家に向かいました。少年自然の家に着いて、引率の先生が児童等の行動を話したら感激し、早々に風呂の支度をして児童等を入浴させ、衣類も乾燥して下さったそうです。

帰校後、担任の先生は事の一部始終を校長先生に報告しました。後日父兄の集会の際に、校長先生は、子ども達のその行為を披露したそうです。父兄の方々も感激し、この様な子ども達を学校だけではなく、父兄も共々に守って行こうと協力に絶大な讃意を示して下さいました。

実はこの学校より北部の地区の学校で、以前に年を隔て、刃物を持った男の侵入が2校あり死傷者もでました。子ども達も北から南に事件が下がって来た為、次には自分達の学校も襲われるのかと危惧していた様で、校長先生にも「今度は自分達か」と、子ども達からの心配の話しかけがあったそうです。校長先生は「悪い人もいるが、良い人の方が遥かに多いから心配しないで」と、子ども達の心のケアをしていました。その様な痛ましい事件の絡みもあり、校長先生も父兄からの声はとても心強く、大きな励みになったと言われました。

この校長は、私が、昭和29年4月に他の病院から転勤し就任した時に、彼は小学校の3年生で、カリエスにて整形外科に入院しており、副科として小児科で診察に当たりました。カリエスの治癒後は、主治医となり対応しました。彼は四人兄弟の長男で、父は病死され、祖母、母の六人家族で、母親が女手一つでかなり手広く農業を営んでみえました。未だ農業に機械も取り入れられない時代でしたので、過酷な働きをしなくてはなりません。その上、生活の為の収入の面についても大変な時代であり、子どもの日常生活、病気の子に対する労り等、並大抵では無かったと思います。長子の入院の際には田植えの時期に重なり、泥に塗れた仕事着のまま、子どもの様子を見に来て下さった事も未だ脳裏に浮かびます。彼もその様な母の背中を見て育ち、自然に人に接する態度を学んだと思います。過去の彼の病気が地元での就職を拒われ、余儀無く母とは別の府県に住み、教職に専念し校長になりました。彼も兄弟も母の後ろ姿を見て育っているので、母親をこよなく愛し、彼も遠路機会を見ては、奥様と連れ立って母の元を訪れています。私もお母さんとお会いすると、昔の苦労話と共にお子さんの良く尽くして下さいました。

この学校の子ども遠は家庭に於いて、両親の言葉だけでなく、行為の中にも「人に迷惑を掛けないように」、「他人に対するおもいやり」と言う事を知らず知らずのうちに教えられ、又学校に於いても、校長の人となりより醸し出す雰囲気、職員全体に暖かい職域が構成されて

なされた行動であったと思います。

中日新聞の中日春秋に、四十五歳の誕生日を迎えられた皇太子さまは記者会見で愛子さまの養育の思いを語り、感銘を受けたという詩「子ども」を紹介した記事があり、米の家庭教育学者ドロシー・ロー・ノルトの詩。とありました。私もこの詩を読んで感動しましたので、その詩を引用させていただきます。

「子は親の鏡」

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる

とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる

子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる

親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にはならない

誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ

愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ

認めてあげれば、子どもは自分が好きになる

見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる

分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ

親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る

子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ

やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもはやさしい子に育つ

守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、子どもはこの世の中はいいところだと思えるようになる

(ドロシー・ロー・ノルト著 石井千春訳 『子どもが育つ魔法の言葉』よ

り)

子どもはよく言われるように育てられた様に育つと申します。校長先生もこの詩にある様な母の愛情こより育てられた姿と思います。

この様に成長された彼とは、未だお付き合いを続けております事は、小児科医冥利に尽きると思っております。

私の子育てはどうであったかと、改めて反省させられる材料を頂きました。

相手を思いやる心が益々必要になると同時に、子どもと言う弱者に対する被害の無くなるように念じて止みません。

追記： この原稿を書き終え、偶々3月29日、午後7時30分から始まった、NHKのクローズアップ現代「親の心をつかんだ19行の詩」で、この「子は親の鏡」の詩に関する放映がありました。御覧になられた先生も多いと思います。